

充実した人生のための基礎知識〜』(資料2)
(本パンフレットは、平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業)「母子保健事業の効果的実施のための妊婦健診、乳幼児健診データの利活用に関する研究」(研究代表者:山縣然太郎)で作成された教育用パンフレットである)を配布し、通読した学生による教材の評価を回収し、分析した。この結果から、大学生が必要としている教育内容を明確にした。

具体的には、K 大学の 1 年生の必修科目である「大学・社会生活論」の中の「健康論」(1コマ 90 分)を受講した学生を対象とし、パンフレット教材(資料2)に対する評価、必要と思う内容、必要と思わない内容、配布方法、パンフレットの改善案について、独自に K 大学で作成した調査用紙(Ⅱ分担研究報告 7 の資料)で、回答を求めた。講義開始時にパンフレット(資料2)と調査用紙(Ⅱ分担研究報告 7 の資料)を配布し、講義終了時にパンフレットを通読後、記入を求めた。回収 1,237 部中、有効回答数は 1,099 部(男性 691 人、女性 408 人)だった。この解析では、SPSS Ver. 19 (日本 IBM)を用いた。

尚、この調査に際しては、金沢大学医学倫理審査委員会の審査を経た後、共通教育のカリキュラム委員会で、調査を実施することについて了承を得て、実施した。

(3)上記(1)(2)の分析結果に基づいた DVD 教材の作成(研究分担者:西尾、林、山本、研究協力者:堀田)

上記(1)(2)の分析結果から、大学生や高校生に提供すべき教育内容を明らかにした。そして、大学や高校の講義の中で実際に使用できる DVD 教材『男性のからだのこと 女性のからだのこと -健康で充実した人生のための基礎知識-』(資料 3)を作成した。本 DVD 教材は、妊娠や出産に関する正しい基礎知識を獲得してもらうことを目的

とし、教育・啓発プロモーション教材という形で作成した。全 38 分で、「女性のからだのこと」、「男性のからだのこと」、「妊娠について」、「リプロダクティブヘルス」、「出産年齢」、「いきいき健康であるための食事」の 6 つのチャプターからなる構成とした。

(4)大学生と高校生における妊娠や出産、ライフプランに関する知識レベルと教育効果の調査(研究分担者:西尾、協力者:堀田、佐渡)

既存のパンフレット教材(資料2)の中から、特に若い男女にとって重要と思われる知識内容を抽出して、質問紙『評価質問票 講義前講義後』(資料4)を作成した。この中で Q1~13 は、1.正しい、2.誤っている、3.わからない、の 3 つの選択肢のうちから一つを選ぶ知識を確認する問題を設定した。正答を 1 点として 13 点満点中の得点で知識レベルを評価した。正答率が低かった問題の知識内容は教育提供が必要と推察されるため、正答率とその内容について分析した。特に、高校生と大学生や男性と女性で正答率に差があるか比較分析することで、年齢や性別による違いも検討した。さらに、DVD 教材の視聴前後における正答数の変化を検討することにより、DVD 教材(資料3)の教育効果も評価した。一方、既存のパンフレット教材(資料2)を自己学習した場合の前後や、DVD と同じ内容のスライド教材(資料3)を使用して教員が講義した前後においても同様の評価質問票(資料4)による回答を受講者に求めた。

これらの教育受講者を①教育用 DVD を視聴した群(DVD 群)、②教育用 DVD と同等の内容の講義を聴講した群(講義群)、③パンフレットを読んだ群(パンフレット群)の 3 群に分け、各々を比較することで教育介入方法の有効性の比較検討を行った。教育介入前後で、誤答から正答に転じた者を「改善者」、教育介入前の誤答者数に占める改善者数の割合を「改善率」と定義して、検討し

た。教育介入後の合計点から教育介入前の合計点を引いた値は「変化点数」と定義して、検討した。

この解析の対象者は、高校生 875 人、大学生 1,268 人であるが、それぞれ回答に不備のなかった、853 人(男性 377 人、女性 469 人、不明 7 人、平均年齢 16.31±1.04 歳)と 1,255 人(男性 415 人、女性 821 人、不明 19 人、平均年齢 19.29±1.45 歳)を分析した。有効回答率は、それぞれ高校生 97.5%、大学生 99.0%であった。回答済みの調査用紙は、電子媒体に入力してデータベース化し、SPSS (Ver. 22)(IBM Japan)を用いて、統計解析した。高校生、大学生の知識レベルの評価は、年代・性別ごとに合計点の平均を算出して 1 要因分散分析を、教育介入方法の有効性の比較は、各群における介入前後の合計点の平均について、属性(高校生男子、高校生女子、大学生男子、大学生女子)と教育介入方法(DVD、講義、パンフレット)を独立変数、変化点数を従属変数とした 4×3 の分散分析を行って検討した。

(5)DVD 教材を用いた講義実践における知識レベルの変化(研究分担者:高田、研究協力者:宮下、安達、有菌、井上、勝木、甲村)

上記(3)で作成した DVD 教材 (資料3) を視聴する講義を実践し、その前後で、受講者を対象に『評価質問票 **講義前** **講義後**』(資料4) の回答を求めた。DVD 教材の視聴前後における正答数の変化を検討することにより、DVD 教材 (資料3) の教育効果を評価した。特に、妊娠や出産、ライフプランに関する知識レベルに対する教育効果に着目した。月経、妊娠、出産、不妊、栄養に関する質問の正答率と講義前後の比較、およびライフデザインとの関連について SPSS Ver. 19 (日本 IBM) を用いて解析した。

この解析では、全国の高校生 875 人、大学生 1,271 人、計 2,146 人のうち、女性のみ、高校生

478 人、大学生 822 人、計 1,300 人の回答を対象とした。

[本研究における倫理的配慮]

本研究における各種調査の実施については、回答対象が学生であるため、細心の注意を払った。調査実施の機会は授業や講義時間の一部を利用したものの、調査の協力や回答内容は、成績評価や単位認定にまったく関係ないことを説明し確認した。また、回答の協力は自由意志に基づくもので、協力しなかったとしても不利益を被ることは一切ないことも確認した。協力しない場合は、協力しない意思表示をする必要はなく、解答用紙を提出しないか、白紙のまま提出すればよいことを説明した。調査結果は、電子的に入力されデータベース化されるものの、すべて個人が特定できない形で保存され、個人を追跡することはできないことも説明した。これらのデータは統計的に解析して結果を公表することはあるものの、個人が特定される形で公表されることはありえないことも十分に説明した。

本調査の実施と分析については、岐阜大学大学院医学系研究科倫理審査委員会で審査され、承認を得た(承認番号 25-268、26-123)。

C. 研究結果

(1) 若い男女における結婚、出産についての意識調査

①結婚や育児希望に関する意識の実態(高校生と大学生の比較も含め)(研究分担者:西尾、研究協力者:堀田、佐渡)

1. 人生の中で重視すること

人生の中で重視することを、勉強、仕事、家庭、趣味、健康、友人、恋愛、収入、地位・名声、社会貢献、子育ての 11 項目の中から順序づけさせたところ、「子育て」は、男性、女性、高校生、大学生ともに 11 番目と最も関心が低かったが、「健康」に

対する関心が最も高かった。

2.結婚希望、挙児希望、欲しい子供の人数、初産の年齢

結婚希望に関する質問で、「いずれ結婚するつもり」、「一生結婚するつもりはない」、「考えたことがない」の3つから選択回答させたところ、高校生では男性 72%、女性 81%が、大学生では男性 78%、女性 91%が「いずれ結婚する」を選択し、「一生結婚するつもりはない」と答えた者はいずれも 5%以下であった。結婚を希望する年齢の平均は、高校生(男性 25.0±4.0、女性 23.8±2.2 歳)、大学生(男性 26.8±2.8、女性 25.9±1.9 歳)であった。挙児希望に関して、「子供は欲しい」、「子供は欲しくない」の2つから選択させたところ、高校生は男性 84%、女性 88%が、大学生は男性 86%、女性 93% 挙児を希望していた。「何歳までに第1子を持ちたいか」という質問では、高校生と大学生で大きな違いがあった。「25 歳までに産みたい」と答えたのは、高校生は男性 30.2%、女性 50.4%であったが、大学生は男性 6.6%、女性 14.3%であった。大学生の男性では、「(自分が)35 歳までに産みたい」と答えた者が 21.9%で、高校生に比べて晩産化にシフトしていた。

3.将来の子育てに関する不安

子供を持つことに対する不安について、「金銭的な不安」「キャリア形成の妨げになる」「ライフスタイルが変わってしまう」「健康上の不安」「家族の要因による不安」「パートナーが見つからない不安」「子供を育てる自信がない」「妊娠や子育てへの知識や情報の不足」の中から複数回答で選択させたところ、高校生・大学生の男女ともに「金銭的な不安」が突出して多かった。次に、「子供を育てる自信がない」、「妊娠や子育てへの知識や情報の不足」が多かった。大学生の女性では、「パートナーが見つからない」も多かった。

4.不妊、妊孕力、不妊治療に関する知識

不妊の定義を知っていたと回答したのは、高校

生で男性 20.7%女性 33.0%、大学生で男性 26.2%女性 36.2%であった。「女性の妊娠する能力が 30 歳を過ぎた頃から少しずつ低下すること」を、「よく知っていた」と答えたのは、高校生で男性 13.7%女性 22.3%、大学生で男性 30.0%女性 41.9%であった。高校生の男性では、「全く知らなかった」と答えた者が 36.1%いた。「不妊治療を受けていても女性の妊娠する能力は年齢と共に少しずつ低下すること」について「よく知っていた」と答えたのは、高校生で男性 8.0%女性 14.1%、大学生で男性 19.4%女性 31.0%であった。

5.結婚、挙児希望に影響を与える要素

高校生と大学生における「結婚希望」「挙児希望」と、「将来への経済不安」、「実家の経済力」、「現在の健康状態」、「健康への関心」、「主食・主菜・副菜の揃った食事の頻度」との関係、さらに「挙児希望」と「結婚後の就労意識」との関係を検討したところ、以下のような傾向が見られた。

経済不安を感じているかという質問に対して、「どちらとも言えない」(普通)と答えた高校生で結婚を希望する者の割合が最も高かったが、大学生では経済不安の強さと結婚を希望する者の割合のあいだに負の相関が見られた。

実家の経済力が「上」または「中の上」と答えた者は、高校生、大学生ともに結婚を希望する学生が多く、「下」または「中の下」と答えた学生は少ないという実家経済力と結婚希望のあいだには正の相関があった。

現在の健康状態が「良い」「普通」と答えた高校生に比し「悪い」と回答した高校生に、結婚を希望する者が少なくなる傾向がみられた。自分の健康に、「あまり関心がない」「全く関心がない」と答えた高校生は、「普通」と回答した者に比し結婚を希望する者が有意に少なかった。

大学生では、「健康状態」「健康への関心」と結婚を希望する者の割合に正の相関が見られた。大学生では、栄養バランスの揃った食事を取る回

数が1日1回未満(しかない)群で、結婚を希望する者の割合が高い傾向にあった。

経済不安が「強い」と回答した高校生は、「普通」と回答した高校生よりも、子供を希望する者の比率が有意に低かった。大学生では、経済不安の強さと子供を持ちたい者の割合は負の相関を示した。「実家の経済力」「現在の健康状態」「自身の健康への関心」は、高校生・大学生ともに、育児希望に対して正の相関関係を示した。

結婚を契機に働き方を変えたいと思いませんか」という質問に対して「家庭を優先したい」と答えた者において、高校生・大学生ともに育児希望する者の割合が高かった。しかし、「仕事を辞める」と答えた群は、高校生で育児希望の割合が上ったものの、大学生では育児希望の割合は下がった。

②「子どもが欲しい」という回答をもたらす因子についての検討 (研究分担者：吉川、研究協力者：足立)

高校生は「子どもが欲しい」と答えた者は 87.7%で、「結婚するつもり」と答えた者の 95.8%は「子どもが欲しい」と思っていた。高校生では「子どもが欲しい」と「いずれ結婚するつもり」との回答には相関があった($p<0.0001$)。大学生においても、「子どもが欲しい」と「結婚するつもり」には相関があった($p<0.0001$)。

「自分の育ったような家庭を自分も築きたいか」という質問の回答「1. 思う、2. 思わない、3. わからない」と「子どもが欲しい」「欲しくない」との因果関係を名義ロジスティック解析で分析したところ、「自分の育ったような家庭を築きたい」と「子どもが欲しい」とは因果関係があった(高校生; $p<0.0001$, 大学生; $p<0.0001$)。

「自分の家は、食事が楽しく心地良かった」と「子どもが欲しい」の因果関係をみたところ、食事が楽しかったと答えることと、子どもが欲しいと回答することには因果関係があった(高校生; $p<0.0001$, 大学生; $p<0.005$)。

部活動を「していた」「していない」の回答と「子供が欲しい」の名義ロジスティック解析をすると、高校生、大学生ともに、「部活動をしていた」と「子供が欲しい」ことに因果関係があった(高校生; $p<0.0002$, 大学生; $p<0.0001$)。大学生では「自分の健康に関する関心」と「子どもが欲しい」と思うことに因果関係があった($p<0.0005$)。

③結婚と育児を望む高校生と大学生の心理を、未来観や家族観などの結びつきから解析する (研究分担者：西尾、研究協力者：佐渡、堀田)

調査で得られた結果を心理学的検討に値する項目に着目して、4 カテゴリー26 項目に整理し、26 項目の出現度数を高校生と大学生とで比較したところ、21 項目に差が認められ、結婚と子どもを持つことを望む者は大学生の方に多かった。

高校生と大学生のデータを、クラスター分析で検討したところ、高校生の高クラスターは、I (C9: 人生で地位や名声が重要、C10: 人生で社会への貢献が重要、C11: 人生で子育てが重要、A6: 家の経済状態はよい、C7: 人生で異性との付き合いが重要、C8: 人生で収入や財産が重要)、II (A2: 女性、B4: 体型が気になる、D1: 将来は経済的に不安、C6: 人生で友人付き合いが重要、C3: 人生で円満な家庭が重要、D4: 今の家庭が理想的、C5: 人生で健康な体が重要、C1: 人生で勉強が重要、C2: 人生で仕事・アルバイトが重要、A1: 男性、C4: 人生で趣味やスポーツが重要)、III (D2: 将来は結婚したい、D3: 将来は子どもが欲しい、A3: 実家に父親がいる、A4: 実家に母親がいる、A5: 実家にきょうだいがいる、B1: 1 年以内に部活をしていた、B2: 食事時間が楽しい、B3: 食卓の雰囲気は明るい、A7: 自分の健康に関心がある)であった。一方、大学生の高クラスターは、I (C9: 人生で地位や名声が重要、C10: 人生で社会への貢献が重要、C11: 人生で子育てが重要、C8: 人生で収入や財産が重要、C7: 人生で異性との付き合いが重要、A6: 家の経済状態はよい、C2: 人生で仕事・アルバイトが重要、A1: 男性、C4: 人

生で趣味やスポーツが重要)、II (A2:女性、B4:体型が気になる、D2:将来は結婚したい、D3:将来は子どもが欲しい、A4:実家に母親がいる、B2:食事時間が楽しい、A7:自分の健康に関心がある、A3:実家に父親がいる、A5:実家にきょうだいがいる、B1:1年以内に部活をしていた)、III (B3:食卓の雰囲気は明るい、D4:今の家庭が理想的、C3:人生で円満な家庭が重要、C5:人生で健康な体が重要、C6:人生で友人付き合いが重要、D1:将来は経済的に不安、C1:人生で勉強が重要)であった。このように、高校生と大学生とでは質を異にするクラスターが導き出され、社会観や家族観は男女で異なっていた。特に大学生では、男性は社会的な活動に意識が向き、女性は結婚と子どもを持つことに加え、家族や家庭に意識が向いていることが示された。

④将来の結婚や挙児に対する前向きな意識をもつことと、食知識、食態度、食行動、主観的 QOL (SDQOL)、過去の食体験との関連を検討する (研究分担者:林、研究協力者:武見、佐藤)

妊産婦には重要な栄養素である葉酸に関する知識では、男女とも知らない者が多かったが、葉酸に関するいずれの項目でも女性の方が適正回答者は多かった ($p < 0.001$)。食態度に関する質問の中で、料理の楽しさで女性の方が有意に「楽しい」と回答した者が多かった ($p < 0.001$)。料理(調理)に関する自信を問う質問では、男女とも「自信あり」と回答した者が少なく男女差はなかった。現在の食習慣の中で、栄養バランスに関する質問では、男性で適正者が有意に多かった ($p < 0.001$)。野菜料理に関する質問では、有意な男女差はなかった。過去の食体験と初いう習慣的 QOL に関する質問では、いずれも女性の方が良好な回答をする者が多かった ($p < 0.001$)。

葉酸に関する知識の有無は、挙児希望と関連がなかったが、葉酸の摂取時期に関する知識の有無は、結婚に対する前向きな態度と有意な関

連があった。食態度、過去の食体験、及び SDQOL は、男女とも結婚・子どもを持つことに対する前向きな態度と有意に関連していた。男性では、現在の栄養バランスが良好な者において、結婚や子どもを持つことに対する前向きな態度が示された。過去の食体験は、性別に関係なく結婚・挙児希望の両方と関連していた。

⑤結婚、出産のライフデザインと、不妊教育や月経教育との関連 (研究分担者:高田、研究協力者:宮下、安達、有菌、井上、勝木、甲村)

1.不妊の知識について

不妊の定義を「知っていた」と回答した者は、全体で 34.6% (高校生 32.9%、大学生 36.0%) であった。加齢に伴い不妊治療の成功率が低下することを「知っていた」と回答した者は全体で 32.5% (高校生 22.1%、大学生 40.8%) であった。

女性に対する質問で、月経痛があると回答した者は全体で 76.7% (高校生 77.2%、大学生 76.3%) であった。月経痛で「寝込んだり学校を休んだりする程日常生活に支障がある」と回答したものは全体の 28.9% (高校生 29.7%、大学生 28.3%) であった。月経痛があると回答した者のうち、「鎮痛薬を服用している」と回答した者は 50.6% であった。鎮痛薬を使用しない理由では「薬に頼りたくない」との回答が 37.0% で最も多かった。月経痛について誰かに相談したことがあるかを尋ねたところ、「したことがある」と回答したものは全体の約 6 割で、相談者は「母親」と回答したものが約 5 割で最も多かった。

2.不妊知識と結婚・挙児希望との関連

「加齢に伴う妊孕力の低下」の知識がある者ほど、また、「加齢に伴う不妊治療の成功率低下」の知識がある者ほど「いずれ結婚するつもり」の割合が有意に高く、「結婚を考えたことがない」者の割合が有意に低かった ($p < 0.05$)。「不妊の知識」がある者ほど、また、「不妊の定義」を知っている者ほど挙児を希望の割合が有意に高かった ($p < 0.05$)。

⑥経済状態の自己認識と健康に関する知識・意識・行動の関係を検討する(研究分担者:松浦、研究協力者:丸岡、仁木、加藤、樋口、原田、阿部、増満、梶原)

1.経済状態の自己認識

経済状態の自己認識(「上中群」と「下群」の分類)に関して、大学生と高校生で有意差はなかった。

2.健康意識

経済状態の自己認識の「上中群」の方が、「健康状態が良い(とても良い・まあ良い)」と認識しているものが有意に多かった($p<0.001$)が、「自分の健康への関心」に有意差はなかった。

3.体型に対する意識

「自分の体型が非常に気になる」と回答した者は「下群」の方が有意に多かった($p<0.01$)。

4.健康関連行動

経済状態の自己認識と「喫煙行動」「飲酒行動」「運動」の関連では、有意な関連はなかった。

5.食事・食卓に対する認識

「上中群」の方が「食事時間が楽しい」($p<0.01$)、「食卓の雰囲気は明るい」($p<0.001$)、「日々の食事に満足している」($p<0.01$)、「小学生の頃食事が楽しく心地よかった」($p<0.001$)と回答した者が有意に多かった。「食事の待ち遠しさ」や「野菜料理の摂取」について有意差はなかった。

6.将来の生活への考え

「上中群」の方が、「いずれ結婚するつもり」($p<0.001$)、「将来子供がほしい」($p<0.01$)、「自分が育ったような家庭を自分も築きたい」($p<0.001$)と回答した者が有意に多かった。

7.妊娠、避妊、月経等に関する知識

「上中群」の方が「加齢に伴う妊孕力の低下」について知っているとした者が有意に多かった($p<0.05$)が、他の知識、避妊方法の選択意向、月経痛の経験などと「経済状態の自己認識」の間に有意な関連はなかった。

(2)ライフプランに関する教育をうけた大学生の教育用教材に対する意識調査(研究分担者:吉川、研究協力者:足立)。

既存のパンフレット(資料2)の通読後の内容については、「興味をもてる」59.9%、「重要である」87.2%と高評価であった。パンフレットの出来上がりについても「大きさは適切である」69.8%、「厚さ(ページ数)は適切である」78.0%、「字の大きさは読みやすい」85.2%、「見やすい・読みやすい」84.5%と高評価であった。パンフレットを「自分が持っておきたい」と回答した者は49.5%であったが、「友人(男性)に紹介したい」は30.5%、「友人(女性)に紹介したい」は29.3%、「交際相手に紹介したい」は29.2%であった。パンフレットの具体的な改善案としての自由記載には「健康面、心理面にもっと目を向けると良い」「育児のことも書いてみたら良い」「実際の例をもっと多く載せてほしい」などがあつた。

パンフレットの内容で必要ないと感じた部分を挙げた者は少なかった。既存の内容の中で「必要と思う」と回答された項目は「健康で充実した人生のために」67.1%、「性感染症について」50.2%、「健康は大切(食事、運動、睡眠他)」49.2%であった。パンフレットを宣伝するのに効果的な方法について尋ねたところ、「授業で配布する」が58.1%で最も多く、授業で用いられる「ポータルサイトで情報を配信する」が37.3%で次に多かった。

パンフレットに関する評価では、女性の方が男性に比し、よりパンフレットの内容が重要であると考え、パンフレットの厚さ、大きさ、読みやすさの評価が高く、パンフレットを持っておきたいと考えることを認めた。所属学部別では、有意差はなかった。

パンフレットに必要と思う内容についても有意な男女差のある項目があつた。男性が女性より必要と感じた内容は「健康で充実した人生のために」($p<0.01$)と「男性に多い性の悩み」($p<0.001$)で、

女性が男性より必要と感じた内容は「女性の月経サイクル ($p < 0.05$)」「月経に関する悩み ($p < 0.001$)」「妊娠について ($p < 0.01$)」であった。所属学部別では、5項目に有意差があった。「健康で充実した人生のために ($p < 0.05$)」と「男性に多い性の悩み ($p < 0.05$)」が必要と回答した者は理科系の方が多く、「月経に関する悩み ($p < 0.05$)」を必要と回答した者は文科系の方が多かった。

(3)上記(1)(2)の分析結果に基づいたDVD教材の作成(研究分担者:山本、西尾、林、研究協力者:堀田)

『若い男女における結婚、出産についての意識調査』(資料1)の分析結果や、既存のパンフレット教材を通読後の評価分析から明らかとなった大学生や高校生に提供すべき教材内容を盛り込みDVD教材(資料3)を作成した。大学や高校の講義で利用できる内容に心がけた。また、教育現場で使いやすいように、チャプターごとに区切られた構成とした。

(4)大学生と高校生における妊娠や出産、ライフプランに関する知識レベルとその教育効果の調査(研究分担者:西尾、研究協力者:堀田、佐渡)

1.教育介入前の知識レベル

教育介入前の調査質問票の回答合計点の平均は、全体で 7.12 ± 2.65 点(高校生男子 5.21 ± 2.66 点、高校生女子 6.82 ± 2.38 点、大学生男子 7.09 ± 2.59 点、大学生女子 8.20 ± 2.27 点)であった。介入前の回答で、高校生、大学生ともに正答率が低かったのは、「排卵期の時期」「分娩予定日」「不妊症」「性感染症」に関する設問であった。「緊急避妊薬」に関する設問は、高校生で 22.6%の正答率であったが、大学生は 43.9%であった。

2.教育介入前後の知識レベルの変化

介入前に高い正答者数、正答率を示した設問は、介入後も高い値を示していた。

介入後の改善率は、どの設問も概ね 60%以上の値を示していた。介入方法ごとに見ると、高校

生では DVD 教材介入群での改善率が低い設問が多かったものの、大学生では 13 問中 10 問で DVD 教材の介入による改善率を最も高く認めた。

3.教育介入方法による介入効果の比較

教育介入前後での評価質問紙の合計点の変化は、高校生男子では DVD 教材(2.66 ± 3.89 点)よりも講義(4.11 ± 2.69 点)パンフレット(4.35 ± 2.83 点)を用いた方が、高校生女子では DVD(2.71 ± 2.83 点)よりもパンフレット(3.72 ± 2.35 点)を用いた方が変化点数は大きかった。大学生男子ではパンフレット(1.05 ± 1.50 点)よりも DVD(2.60 ± 2.45 点)、講義(2.74 ± 2.67 点)を用いた方が、大学生女子ではパンフレット(1.00 ± 2.28 点)よりも DVD(2.36 ± 2.13 点)を用いた方が変化点数は大きかった。また、大学生男子(2.74 ± 2.67 点)や大学生女子(2.05 ± 2.32 点)よりも高校生男子(4.11 ± 2.69 点)や高校生女子(3.54 ± 2.41 点)に用いた方が変化点数は大きかった。パンフレットも、大学生男子(1.05 ± 1.50 点)や大学生女子(1.00 ± 2.28 点)よりも高校生男子(4.35 ± 2.83 点)や高校生女子(3.72 ± 2.35 点)に用いた方が変化点数は大きかった。

(5)DVD教材の視聴による講義実践と知識レベルの変化の評価

高校生と大学生の女性全体の正答率は、DVD教材使用の講義前後で次のように変化した。「不妊の定義」39.2%⇒87.8%、「加齢に伴う妊孕力の低下」83.1%⇒95.9%、「加齢に伴う不妊治療の成功率低下」59.7%⇒88.7%、「月経周期」77.5%⇒86.7%、「月経痛時の鎮痛薬の服用」53.3%⇒89.0%、「排卵時期」27.4%⇒45.6%、「出産予定日」40.1%⇒71.3%、「妊娠中の栄養が胎児に影響すること」96.8%⇒98.4%、「緊急避妊薬の服用時期」39.8%⇒72.7%であった。いずれの問題でも、「わからない」という回答割合は講義後の方が減少していた。

D.考察

(1) 若い男女における結婚、出産についての意識調査

①結婚や挙児希望に関する意識の実態(高校生と大学生の比較も含め) (研究分担者:西尾、研究協力者:堀田、佐渡)

高校生・大学生は、結婚・挙児を希望する者が大多数であり、結婚や出産を避けるような意識変化は見られないが、高校生よりも大学生の方が結婚・挙児の希望は増加していた。「結婚をしたい年齢」についても、高校生・大学生、男女ともに25歳前後であった。この結果からは、現在の我が国で起っている晩婚化・少子化の現象を説明できないことが示された。高校生は、自分が30歳までに第1子を出産すると答えた者が84.2%で、大多数の高校生は晩産に至るイメージを全く持っていないと推察された。唯一、「第1子を持ちたい年齢」が男性大学生で若干高くなることより、挙児を先延ばしする傾向が、男性において大学生の年代に出現する可能性が推察された。今後は、晩婚や晩産の傾向がどの年代で何故現れるかについての検討が必要である。

高校生・大学生ともに、大多数が結婚や挙児を希望するものの、人生における「子育て」の優先度が低く、将来の「子育て」に対して経済的不安や知識・情報不足による不安も多かった。

近年は、年の離れた兄弟姉妹はめずらしくなり、親戚の交流も希薄になっているため、高校や大学のカリキュラムや実体験学習の場で、小児に触れる機会を増やし、「子育て」をもっと身近に体験できるようにした方が良いと思われる。また、子育て世代の若いカップルとの交流の機会を大学や高校で提供できると、自分のロールモデルを見出せると期待できる。

高校生・大学生の、不妊や妊孕力、あるいは不妊治療などに関する知識はおしなべて低かったものの、高校生より大学生、男性より女性の方が、

知識を有している人数割合は多かった。不妊や妊孕力、不妊治療などに関する教育は、大学生や社会人の年代の方が高校生より適切な時期かと推察された。

結婚希望に影響を与える因子は、高校生で「実家経済力」、大学生で「将来の経済不安」の影響が強かった。高校生・大学生の年代で、すでに経済的背景が「結婚の希望」に影響を与えていることが示された。また、健康状態が良い程、健康への関心が高い程、結婚を希望する者の割合が高くなるという傾向も見られた。挙児希望に影響を与える背景は、高校生で「実家経済力」、大学生で「将来の経済不安」「実家経済力」「健康状態」「健康への関心」の影響を強く受けることが示された。今日の少子化や晩婚化に対するアプローチの視点としては、「経済」と「健康」であることが高校生や大学生でも重要であることが示唆された。

②「子供が欲しい」という回答をもたらす因子について抽出分析する (研究分担者:吉川、研究協力者:足立)

高校生・大学生ともに、「子どもが欲しい」という回答と「将来、結婚するつもりである」、「自分が育ったような家庭を築きたい」、「自分の家は、食事が楽しく心地良かった」という回答は、関連が深かった。育った家庭環境が良好であった場合に「子どもがほしい」と思わせることがわかった。これは、育った環境が将来の家庭や挙児に関する希望を左右することを意味し、家庭という最小単位のコミュニティーのあり方が極めて重要であることが示唆された。

部活動の経験者の方に挙児希望が多いという関連も示された。部活動というコミュニティーにおける他人との関わり合いの中で自己を知ることが、将来の自己実現などを通じて結婚や挙児希望に繋がること伺われた。高校生・大学生が我々の感じる自己の概念は他人との関係性の中で生まれるものであることに気づき、自己の将来や人生

について考える機械を与えるような教育が必要と
考えられた。健全なコミュニティー、機能的な社会
の形成の一つである結婚や育児について高校生
や大学生が前向きに考えるためには、他人との関
係性の中に生きることの喜びを感じるような体験が
不可欠と考えられた。

大学生は「健康への関心度」と「子どもが欲しい」
という回答の間に関連があった。大学生がもつ健
康への意識は、「より良く生きたい」という前向きな
姿勢の現れと推察すれば、将来に希望を持って、
「明るい家庭を持ちたい」「子どもがほしい」「母親
や父親の役割を自分の両親と同じようにしてみたい
」と思うことは自然な方向性と理解できる。また、
大学生では「子どもが欲しい」という回答と「仕事と
育児の両立」を望むことに関連があった。大学教
育において、より良い自己の実現に繋がる健康情
報の提供が、また、社会政策的には、仕事と育児
の両立による育児希望をかなえるような仕組み作
りが必要であると考えられた。既に、大学における
健康教育や社会における仕事と育児の両立が必要
であるという指摘は散見されるが、今回の我々の
解析は、その科学的根拠を提供できた。高校
や大学における健康教育、食育、コミュニケーション
教育の充実が、社会政策における子育て支援・
職場改善などの取り組み同様、少子化対策に繋
がること示唆された。

**③結婚と育児を望む高校生と大学生の心理を、
未来観や家族観などの結びつきから解析する**
(研究分担者:西尾、研究協力者:佐渡、堀田)

今回の解析から「将来は結婚したい」と「将来は
子どもが欲しい」の項目は、大学生の方が高校生
より有意に多かった。大学生となり、心理的な成長
を経て結婚や育児に積極的になる可能性が考え
られた。

高校生では、「結婚や育児希望の思い」と「家
族・家庭」という内的な対象には強い心理的関
連があることが示唆された。高校生に「結婚した

い」や「子どもが欲しい」との思いを実現できるよ
う教育的介入をするのであれば、個人の家族・
家庭状況を踏まえる必要があると考えられた。高
校生では、「結婚や育児希望」と「社会観」とは、
統計的に遠い関係にあった。高校生の年代では、
自らが家庭を持つことと社会に出ることは、まだ
相反する関係にあるのかもしれないので、結婚
や子どもを持つことに関するプロモーションを高
校生に対して実施する際には、留意すべき点と
考えられた。

大学生のクラスター分析は、Ⅰ:趣味や仕事
など一般的な意味での「男性らしさ」、Ⅱ:結婚や
育児希望など「女性らしさ」、Ⅲ:現実的な環境な
どと関連する3つであった。大学生では「男性ら
しさ」のクラスターに「人生で子育てが重要」が含
まれ、「女性らしさ」のクラスターでは家族・家庭
へと目が向けられていた。大学生の方が、男性
は自らの外部や社会への意識が向上し、女性は
自らの内部や家族への意識が向いていると推察
された。現在、社会で活躍している女性が増えて
いるものの、大学生の年代の心理的には、男性
は家の外へ、女性は家の内へ、という志向性が
残っている可能性が考えられた。

**④将来の結婚や育児に対する前向きな意識をも
つことと、食知識、食態度、食行動、食に関する主
観的 QOL(SDQOL)、過去の食体験との関連を
検討する** (研究分担者:林、研究協力者:武見、
佐藤)

今回の解析で、現在の食態度や SDQOL、過
去の食体験が良好である者は、将来に対する性
別や経済的な不安感に関係なく、結婚や子ども
を持つことに対して前向きな態度を持っていること
が示された。現在の食生活の質や、過去の食体験
は、良好なライフプランニングに影響する可能性
が示唆された。子どもの頃から家族での楽しい共
食機会を増やすことは、若い男女の結婚や出産
に関するヘルスプロモーションにおいても重要な

要素であると考えられた。食事づくりが楽しいという前向きな姿勢を育めるような教育が望まれる。

尚、葉酸は、妊娠可能な年齢の女性において大切な栄養素であるため、葉酸摂取と胎児の神経管閉鎖障害発症リスク低減に関する知識の普及は若い男女に必要と考えられる。

⑤結婚、出産のライフデザインと、不妊教育や月経教育との関連を検討する（研究分担者：高田、研究協力者：宮下、安達、有菌、井上、勝木、甲村）

高校生、大学生の約3人に1人以上はどこかの機会に、不妊の定義についての知識を得ているようであった。また、加齢に伴う妊孕力の低下、加齢に伴う不妊治療成功率の低下の知識は、大学生で8～9割、高校生で5～6割が得ていた。地方自治体が発行しているパンフレットなどで加齢に伴う妊孕力の低下に関する啓発がされているが、不妊の定義などの基礎的な知識が抜けてしまわないよう、不妊に関する系統立てられた知識を獲得する機会が提供されるべきと考えられた。

⑥経済状態の自己認識と健康に関する知識・意識・行動の関係を検討する（研究分担者：松浦、研究協力者：丸岡、仁木、加藤、樋口、原田、阿部、増満、梶原）

今回の解析で、経済状態の自己認識は生活習慣の基盤となる食事や食卓への意識・態度、将来の生活の基盤となる結婚や育児への意識・態度と関連が深かった。意識・態度の変容を目的とした健康支援においては、これまで育ってきた家庭や現在の生活への肯定的な見方を育む必要があると考えられた。一方、妊娠等の知識は、経済状態認識に影響をうけていなかったことから、思春期・青少年への母子保健教育は、全員に知識を身につける仕組みでよいだろうと考えられた。

②ライフプランに関する教育を受けた大学生の教育用教材に対する意識調査（研究分担者：吉川、研究協力者：足立）

既存の教育用パンフレット(資料2)について、大学生からは、「本パンフレットは大学生にとって重要な内容を扱っており、見やすい」との高い評価を得られた。ただ、性に関する内容については、「重要な内容ではあるものの気軽に他者と話し合うことは抵抗があるため、授業で扱ってほしい」という要望があった。今回の調査対象は、医学系、保健系を除く人文系、理工系、薬学系の学生で、非医療分野で就職する学生が多かったにもかかわらず、高い関心と評価があったことは意義深い。中学・高校で、男女の身体や性感染症、妊娠・出産に関する保健教育を受けているはずではあるが、ライフプランを考える視点までは中学・高校では難しい。人生を熟慮する機会を提供する役割としての本パンフレットは重要であり、大学生を中心とした高等教育現場において利用価値が高いと考えられた。保健管理施設に専任教員が在籍しない小規模大学での利活用では、eラーニング教材の開発などが必要と考えられた。

③上記(1)(2)の分析結果に基づいたDVD教材の作成（研究分担者：西尾、林、山本、研究協力者：堀田）

上記(1)(2)の結果に基づいて、女性のからだのこと、男性のからだのこと、妊娠について、リプロダクティブヘルス、出産年齢、いきいき健康であるための食事の6つのセクションからなるDVD教材を作製した。DVD教材作製の最終原稿は(資料3)に添付する。

④大学生と高校生における妊娠や出産、ライフプランに関する知識レベルと教育効果の調査（研究分担者：西尾、協力者：堀田、佐渡）

妊娠・出産に関する知識量の実態は、高校生よりも大学生の方が、知識量が多いことが示された。また、高校生、大学生どちらの年代においても、男性の方が女性よりも得点は低かった。年代、性別の違いに関わらず、教育・啓発を行っていく必要があることは言うまでもないが、特に男性の妊娠

や出産に関する知識は不足しており、教育の必要性が示唆された。また、排卵期、分娩予定日、不妊症、性感染症に関する設問は、高校生、大学生ともに正答率が低かった。妊娠、出産を計画する上で排卵期や分娩予定日に関する知識を持つことや、不妊症や性感染症など妊娠を妨げる要因について知ることは肝要であるから、これらについて学校教育で重点的に指導すべきであろう緊急避妊薬に関する知識は高校生で特に不足していた。望まない妊娠は若年層で増加傾向にあるため、これについても、高校生年代から、正しく教授していく必要性が示された。

改善率によって検討した教育介入効果は、DVD、講義、パンフレットとも概ね 60%以上の値を示していたため、どの方法も知識の獲得に有効であることが示唆された。しかし、排卵期やBMIに関する設問の改善率は低く、「排卵は月経開始の2-3 日前に起きている」を正しいとした回答や、「BMI で 18.5 未満をやせという」を正しいと答えられなかった回答が介入後も多かった。妊娠・出産の計画や女性の身体の健康管理をする上で、基本であるから、実際に計算をするなど、もう少し印象に残るような教育方法が必要であったかもしれない。

介入前後の変化点数による教育介入効果は、年代や性別によって有効な介入方法は異なることが示された。どの年代、性別においても、介入前後で得点は上昇していたものの、高校生では、講義やパンフレットの方が DVD に比して高い改善効果を示し、大学生では、DVD が他の介入方法よりも高い教育効果があった。従って、教育・啓発活動を行う際には、対象やその環境に応じて教育介入方法を慎重に選択する必要性が示唆された。

(5)DVD 教材を用いた講義実践による知識レベルの変化（研究分担者：高田、研究協力者：宮下、安達、有菌、井上、勝木、甲村）

今回の解析の結果から、DVD の視聴や講義が、不妊や妊孕力の知識獲得の機会として有効であったと考えられた。

今回の若い女性の調査では、約 7 割に月経痛があり、月経痛のために鎮痛薬を使用する者は約 4 割であった。月経困難症の中には、子宮内膜症や子宮腺筋症など将来の不妊症と関連のある疾患が隠れていることもあるので、産婦人科を受診すべきであるが、月経痛の相談は母親が多かった。月経に関する正しい自己管理についての教育は、本人のみでなく、母親など保護者にも必要と考えられた。

高校生や大学生が不妊や月経困難症に関する知識を得る機会、保健体育授業・講義、社会からであろうが、妊娠・出産のライフデザインを考える機会は少ない。今回の DVD 教材を用いた講義が単に知識を提供するだけでなく、このような人生を考える機会も提供する役割を担うと期待される。

E.結論

今回調査した全国の高校生、大学生の回答より次に事が明らかとなった。

1. 大多数が結婚・育児を希望していた。しかも、その大多数が結婚希望年齢は 25 歳前後、第 1 子は 30 歳までに欲しいと回答した。現在の若い男女の意識に、晩婚や少子化を説明できるものはなかった。しかし、現在の意識では、「子育て」の優先度は低く、将来の「子育て」に対して、経済的不安や、知識情報不足による不安を抱いている者が多かった。
2. 育児を希望することと「自分が育つような家庭を築きたい」「自分の家は、食事が楽しく心地良かった」「健康への関心が高い」という回答に関連があった。
3. 現在の食態度や主観的 QOL、良好な良体験と将来の結婚・育児希望に有意な関連があった。

4. 不妊や月経に関する知識レベルには不足やばらつきがあった。

5. 将来の結婚・育児希望は、育った家庭や現在の生活に対する肯定感と関連が深かった。

以上より、晩婚化・少子化が進む我が国においても、高校生、大学生の大多数は結婚・育児を希望しており、何らかのアプローチにより、晩婚化・少子化の流れを変化させる可能性はある。

若者に対して、結婚や出産に対して前向きな気持ちを持ってもらおうというアプローチを取るとするならば、結婚や育児への意識と自身の経済や健康の関連性をはっきりしてくる大学生の時期に行うことが有効である。その際には、今後起こりうる経済的な不安を適切に受け止める力や、自らの身体に起こる変化や食生活・不妊・月経に関する正確な知識、自分の家庭や生活に対する肯定感を持ち、将来のキャリアデザインを描くための知識などを提供する全人的な教育と組み合わせる工夫が有用であろうと考えられた。

以上をふまえ、若い男女を対象に使用できるDVD教材を作成した。視聴前後で行った知識テストでは、教育効果が認められ、有用と考えられた。既存のパンフレットや教員による講義と比較しても遜色なく、内容によっては、より効果的であった。

F. 研究発表

1. 論文発表

1) 吉川弘明、足立由美: ライフプランを含む教育用パンフレットに対する評価と大学生への健康教育ー大学生の健康教育へのニーズと必要性ー: 金沢大学保健管理センター年報・紀要: No.7(通巻41): 68 - 75: 2015.

2) 西尾彰泰、堀田亮、佐渡忠洋、吉川弘明、足立由美、松浦賢長、林芙美、山本眞由美: 高校生を対象とした結婚、出産についての意識調査ー保健の授業で何を教えるべきか? 東海学校保健研究: Tokai Journal of

School Health: 第39巻1号(ページ未定)

3) 西尾彰泰、堀田亮、佐渡忠洋、吉川弘明、足立由美、松浦賢長、猪飼周平、高田昌代、林芙美、加納亜紀、磯村有希、山本眞由美: 大学生における結婚、出産についての意識調査ー大学の健康教育で何を教えるべきか? : CAMPUS HEALTH: 52(1): 154-156.

2. 学会発表

1) 西尾彰泰、堀田亮、佐渡忠洋、吉川弘明、足立由美、松浦賢長、林芙美、山本眞由美: 高校生を対象とした結婚、出産についての意識調査ー保健の授業で何を教えるべきか? -: 第57回東海学校保健学会総会: 於 じゅうろくプラザ(岐阜): 2014.9.6

2) 西尾彰泰、堀田亮、佐渡忠洋、吉川弘明、足立由美、松浦賢長、猪飼周平、高田昌代、林芙美、加納亜紀、磯村有希、山本眞由美: 大学生における結婚、出産についての意識調査ー大学の健康教育で何を教えるべきか? : 第52回全国大学保健管理研究集会: 於 慶應大学三田キャンパス西校舎ホール: 2014.9.3~4

3) 吉川弘明、足立由美、山本眞由美、西尾彰泰、佐渡忠洋、堀田亮: 教育用パンフレット「知っていますか? 男性のからだのこと、女性のからだのこと」に対する大学生の意識調査: 第56回日本教育心理学会総会: 於 神戸: 2014.11.7~9

4) 林芙美、西尾彰泰、堀田亮、佐渡忠洋、吉川弘明、足立由美、松浦賢長、山本眞由美: 高校生・大学生における将来の結婚や子どもを持つことに対する意識と現在の食知識、食習慣、食に関する主観的 QOL の関連について: 第61回一般社団法人 日本学校保健学会学術大会: 於 金沢: 2014.11.15~16.

5) 高田昌代、宮下ルリ子、松浦賢長、山本眞由美、西尾彰泰、堀田亮: 大学における結婚、

出産のライフデザインのための不妊や月経
に関する教育の必要性：日本思春期学会：
於 筑波：2014.8

- 6) Ruriko Miyashita, Masayo Takada, Akihiro
Nishio, Syuhei Ikai, Hiroaki Yoshikawa,
Kencho Matsuura, Fumi Hayashi, Yumi
Adachi, Tadahiro Sado, Ryo Horita, Mayumi
Yamamoto: Need for Education on Pregnancy,
Infertility, and Menstruation for High School
and University Students ' Life Plan
Regarding Marriage and
Maternity ,ICMAPRC , Yokohama, 2015.7
(予定)

G.知的財産権の出願登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

H.添付資料

資料 1:『若い男女における結婚・出産について
の意識調査』(自記式質問調査用紙)

資料 2:『知っていますか？男性のからだのこと、
女性のからだのこと～健康で充実した
人生のための基礎知識』(既存のパンフ
レット)

資料 3: DVD 教材の最終原稿

資料 4:『評価質問票講義前 講義後 』(質問紙)

(資料1) 『若い男女における結婚・出産についての意識調査』(自記式質問調査用紙)

学生の皆さんへ

若い男女における結婚・出産についての意識調査

大学では皆さんが快適に学生生活を送っていただけるよう、皆さんの健康実態や健康教育の必要性の把握に努めています。

今回、アンケート調査を実施し、よりよい健康管理指導を皆さんに提供できるよう役立てることにしました。調査に協力をお願いいたします。記入者名は何いませので、ありのままを気軽に(あまり考えすぎないで)答えてください。

質問票の内容は、データベース化した後、統計処理し、その結果を公表することはありますが、個人が特定されるような情報を公開することは一切ありません。また、回答用紙はデータの入力後、速やかに破棄されます。

もし、協力いただけない場合は、用紙を白紙のまま返却して下さい。協力いただけなくても、不利益を被ることは一切ありません。

_____ 大学

尚、本意識調査は厚生労働省:政策科学総合研究事業「若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関するプロモーションプログラム開発に関する研究」(25010301)の研究活動のひとつで、研究代表者(山本真由美)の所属大学(岐阜大学大学院医学系研究科 医学研究等倫理審査委員会)の審査で承認されています。

1. 学生の基礎情報

1-1 あなたの現在の年齢を教えてください。(数字を記入してください)

() 才

1-2 あなたの性別を教えてください。(どちらかひとつを○で囲んでください)

1. 男性 2. 女性

1-3 あなたの現在の学年を教えてください。(数字を記入。ただし、大学院生は学部年数を足して記入してください。例：修士課程2年は学部年数4を足して6を記入)

() 年生

1-4 あなたが現在所属している学部を教えてください。どれかわからない場合は4番に学部名を書いてください。(いずれかのうち、ひとつを○で囲んでください)

1. 人文社会系 2. 理科系 3. 医療系 4. ()

1-5 いちばん最近に受けた健康診断時の身長と体重はどれくらいでしたか？(小数点第1位を四捨五入した数字を記入してください)

1-5-a 身長 () cm 1-5-b 体重 () kg

1-6 あなたは留学生ですか？(どちらかひとつを○で囲んでください)

1. はい 2. いいえ

1-7 現在、あなたの実家にいらっしゃる家族を教えてください。(いらっしゃる方、すべてを○で囲んでください)

1. 祖父 2. 祖母 3. 父 4. 母 5. 兄 6. 姉

7. 弟 8. 妹 9. 甥^{おい} 10. 姪^{めい} 11. その他

2. 生活や意識について

2-1 あなたは、過去1ヶ月間に1回でもタバコを吸いましたか？（どちらかひとつを○で囲んでください）

1. 吸った 2. 吸わなかった

2-2 あなたは、過去6ヶ月間に、平均して週に1回以上、お酒をのみましたか？（どちらかひとつを○で囲んでください）

1. 飲んだ 2. 飲まなかった

2-3 あなたは、過去1年間に、部活動やサークル活動をしていましたか？（どちらかひとつを○で囲んでください）

1. していない 2. していた



「2. していた」と答えた人にお伺いします。

2-4 過去一年間に所属した部活動やサークル活動は以下のどれにあてはまりますか？
（いずれかのうち、ひとつを○で囲んでください）

1. 運動系 2. 文化系 3. 両方

2-5 あなたは、過去6ヶ月間に日常生活の中で、「歩く」程度の身体活動を1日平均1時間以上していましたか？（どちらかひとつを○で囲んでください）

1. していた 2. していない

2-6 あなたの身長で、現在、あなたが健康的に最適と考える体重はどれくらいですか？
また、あなたが外見的に最適と考える体重はどれくらいですか？（小数点第1位を四捨五入した数字を記入してください）

2-6-a 健康的に最適（ ） k g 2-6-b 外見的に最適（ ） k g

2-7 あなたは、自分の体型について、現在、気になりますか？（いずれかのうち、ひとつを○で囲んでください）

- | | |
|-------------------|--------------|
| 1. <u>非常に気になる</u> | 3. どちらでもない |
| 2. <u>やや気になる</u> | 4. あまり気にならない |
| | 5. 全く気にならない |



「1. 非常に気になる」、「2. やや気になる」と答えた人にお伺いします。

2-8 「体型が気になる」のは、どのような理由からですか？（あてはまるものすべてを○で囲んでください）

- | | |
|-----------------|------------------------|
| 1. 他の人と比べてしまうから | 2. 家族や友人に何か言われたことがあるから |
| 3. 健康の問題があるから | 4. 好きな服を着ることができないから |
| 5. なんとなく | 6. その他（具体的に |

2-9 「体型が気になり始めた」のは、いつ頃からですか？（いずれかのうち、ひとつを○で囲んでください）

- | | | |
|----------------|----------------|-------------|
| 1. 小学校低学年くらいから | 2. 小学校高学年くらいから | 3. 中学生くらいから |
| 4. 高校生くらいから | 5. 大学入学以降 | 6. わからない |

2-10 現在のあなたが、人生の中で重視することについて教えてください。以下にあげた項目について、今のあなたが大切だと思う順に順位をつけてください。（枠の中に一番大切だと思う1位から11位までの数字を記入してください）

順位	人生の中のこと
	a. 勉強
	b. 仕事・アルバイト
	c. 円満な家庭
	d. 趣味やスポーツ
	e. 健康な体
	f. 友人との付き合い
	g. 異性との付き合い（恋愛）
	h. 収入や財産
	i. 地位や名声
	j. 社会への貢献
	k. 子育て

2-11 経済状態を以下の5つの層に分けるとすれば、現在のあなたの実家は、どれに入るとお思いますか？（いずれかのうち、ひとつを○で囲んでください）

1. 上 2. 中の上 3. 中の中 4. 中の下 5. 下

2-12 あなたは、これから先10年間の自分自身の生活について経済的な不安を感じていますか？
(いずれかのうち、ひとつを○で囲んでください)

1. 強く感じている 2. やや感じている 3. どちらともいえない
4. あまり感じていない 5. 全く感じていない

2-13 あなたは、「自分の健康状態」について、現在、どのように感じていますか？ (いずれかのうち、ひとつを○で囲んでください)

1. とても良い 2. まあ良い 3. どちらともいえない
4. あまり良くない 5. 良くない

2-14 あなたは、「自分の健康」について、現在、関心がありますか？ (いずれかのうち、ひとつを○で囲んでください)

1. 非常に関心がある 2. まあ関心がある 3. どちらでもない
4. あまり関心がない 5. 全く関心がない

3. 食事や栄養について

3-1 あなたのふだんの食生活について伺います。過去6ヶ月間をふりかえり、それぞれの項目で最も当てはまる数字をひとつ○で囲んでください。

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらともいえない	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
3-1-a 食事時間が楽しい	1	2	3	4	5
3-1-b 食事の時間が待ち遠しい	1	2	3	4	5
3-1-c 食卓の雰囲気は明るい	1	2	3	4	5
3-1-d 日々の食事に満足している	1	2	3	4	5
3-1-e 料理をするのは楽しい	1	2	3	4	5
3-1-f 料理することに自信がある	1	2	3	4	5

3-2 あなたは、1日のうち、主食（ごはん、パン、めん類等）・主菜（卵、肉、魚、大豆、大豆製品等が主体のおかず）・副菜（野菜、海藻、いも類等が主体のおかず）のそろった食事をどれくらいとっていますか？最も当てはまるものひとつを○で囲んでください。

- 3-2-a 1日に2回以上
- 3-2-b 1日に1回
- 3-2-c 週に4~5回
- 3-2-d 週に2~3回
- 3-2-e 週に1回以下

「3-2-a 1日に2回以上」と答えた人に伺います。

- 3-3 いづれからとっていますか？（いづれかのうち、ひとつを○で囲んでください）
1. 6ヶ月以上継続している
 2. 6ヶ月未満である

「3-2-b 1日に1回」「3-2-c 週に4~5回」「3-2-d 週に2~3回」「3-2-e 週に1回以下」と答えた人に伺います。

3-4 「1日に2回以上、主食・主菜・副菜のそろった食事をすることが健康的に好ましい」とされています。あなたはどう思いますか？（いづれかのうち、ひとつを○で囲んでください）

1. すぐに実行しようと思う（1ヶ月以内）
2. 6ヶ月以内に実行しようと思う
3. 6ヶ月以内に実行する気はない

3-5 あなたは、平均すると1日に野菜料理（野菜を主な材料とした料理）を何皿ぐらい食べていますか？1皿は小鉢1コ分程度と考えてください。野菜ジュースは含めません。過去1ヶ月をふりかえって、あてはまるものひとつを○で囲んでください。

1. ほとんど食べない 2. 1～2皿 3. 3～4皿 4. 5～6皿 5. 7皿以上

3-6 あなたの小学生の頃の食生活を思い出してみてください。「自分の家は、食事が楽しく心地良かった」という印象を持っていますか？（いずれかのうち、ひとつを○で囲んでください）

1. 持っている
2. どちらかといえば持っている
3. どちらともいえない
4. どちらかといえば持っていない
5. 全く持っていない